



クビアカツヤカミキリの発生と防除の現状

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
果樹茶業研究部門

みしろこうじ
三 代 浩 二

はじめに

クビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* は中国大陸原産で、2018年1月に特定外来生物に指定された侵入種である(図-1)。コウチュウ目カミキリムシ科ジャコウカミキリ属に属し、国内7都府県のサクラ(ソメイヨシノ *Prunus × yedoensis*) やモモ *P. persica*, ウメ *P. mume* 等で甚大な被害が発生している(加賀谷, 2015; 桐山ら, 2015; 上地, 2015; 中野・渡邊, 2017; 岩田, 2018; 三代, 2018)。本種はクロジャコウカミキリと呼ばれることもあるが、正式な和名としてはクビアカツヤカミキリが適切である(岩田, 2018)。本稿では、果樹を中心に本種の生態と発生状況、防除の現状について述べる。

I 生態と被害

1 形態

本種は比較的大型のカミキリムシであるが、体長は20~40 mm と幅がある。国内で発生している個体群は前胸背板が鮮やかな赤色で、頭部や腹部はつやのある黒色である。一方、ベトナム北部の個体群は前胸背板もすべて黒色である(岩田, 2018)。

2 生態と被害

雌成虫は羽化直後にはすでに成熟卵を抱しており羽化脱出後すぐに交尾・産卵することが可能である(浦野, 2018)。直径1~1.5 mm 程度の小型の卵を主幹部の樹皮の割れ目などの凹凸のある部位にばらばらと産み落とす(図-2)。モモでは主枝や垂主枝等比較的高い部位にも産卵する。果樹の主要害虫であるゴマダラカミキリ *Anoplophora malasiaca* が長さ約3 mm の米粒のような卵を主幹の地際部の樹皮につけた産卵加工痕の内部に差し込むのとは対照的である。一雌当たり平均382卵、最大1,256卵産卵するが、飼育条件下でのふ化率は平均11.9%にとどまった(浦野, 2018)。ふ化した幼虫は樹皮下の



図-1 クビアカツヤカミキリ成虫

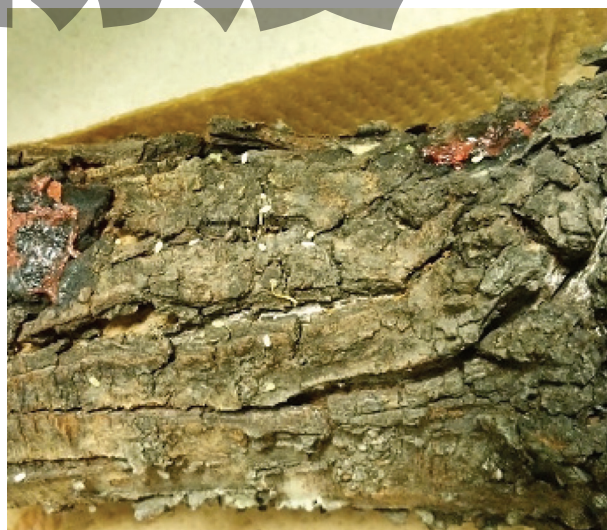


図-2 モモ切り枝に産み付けられた卵

形成層を食害しながら成長し木部に食入する(図-3)。このとき、大量のフラス(糞と木くずが混ざったもの)を排出する(図-4)。越冬直後の幼虫はそうめんのように細くつながったフラスやコスカシバ *Synanthedon hector* の虫糞に似たヤニと混ざった団粒状のフラスを排出するが、成長するに従いうどんのように太いフラスや

Present Status of Occurrence and Control Methods of the Red-Necked Longhorn Beetle, *Aromia bungii* in Japan. By Koji MISHIRO

(キーワード: クビアカツヤカミキリ, バラ科樹木, 果樹, 防除法)